

相沢 育哉 (Aizawa Ikuya)

2020~2021 年度奨学生

オックスフォード大学 教育学部 博士課程

英国・オックスフォード大学の博士課程に所属する、相沢育哉です。遠く離れた英国にいるにもかかわらず、財団の皆さまからは、研究が上手く捲るようにと日頃より優しく応援していただき、多くの場面で大変温かいお言葉を頂いています。この場をお借りして深く感謝申し上げます。現在、コロナウィルス感染症とその拡大防止策として導入されている多くの活動制限の影響で世界の大学教育は大きな変貌を遂げています。このような長引くコロナ禍ですが、死者数が多く記録されている英國に滞在する私のことを心配して、財団の皆さまからは多くの優しいお言葉を頂いております。留学終了時には財団の皆さまに素敵な成果報告ができるよう、今後とも一生懸命に研究生活に励んで参りたいと存じます。この半期報告レポートでは「コロナが英國の大学教育にもたらした変革」「コロナ後の大学教育のあるべき姿」に焦点を当てて、現在のコロナ禍における留学先での研究生活について報告させていただきたいと思います。

1)コロナが英國の大学教育にもたらした変革

英國の大学では 2020 年 3 月に英國全土は第一回目の都市閉鎖が導入されて以来、英國政府の保健省ガイドラインに則り、授業、セミナー、試験、課外活動と全ての大学の活動がオンラインで実施されている状況です。2020 年 8 月に一時期、規制が一部緩和されてからは演習を必要とするコースは(主に医療と教員養成コース)、特例として

対面式授業を取り入れることが可能になりました。ただ、それ以外の多くのコースは今後も当面の間、オンラインを介して実施されていく予定です。

オックスフォード大学は 3 学期制を導入しています。1 学期(10 月開始)、2 学期(1 月開始)ともに、街には学生の姿はほぼ見当たらず、コロナの前は、とても賑やかだった、Broad Street (多くの大学校舎が連なっている賑やかな道) も閑散としていました。大きな理由として授業が全てオンラインに移行したことが挙げられますが、その他に次から次へと導入される英國政府の厳しい行動制限の規則も理由として挙げられます。

例えば、冬季休暇中(12 月初旬から 1 月中旬のクリスマス休暇)に帰郷した大学学部生・大学院生は英國政府が休暇中に新しく打ち出した方針の影響で、新学期開始後も帰郷先から大学に戻ることが出来なくなりました。現在は、ワクチン接種に伴って、徐々に学生が大学に戻りつつありますが、渡航元の国によっては英國に入国後に厳しい行動制限がある場合もあり、留学生が多いオックスフォード大学では多くの混乱を招いています。時差の問題を除けば、世界のどこからでも大学教育にアクセスできる通信制大学・放送大学と変わらない、新しい大学教育の時代の幕開けを迎えるました。

また、大学教育の醍醐味である対面式の授業がオンラインに完全移行したことにより、大学の教授陣の負担は遥かに大きくなったように見受けられます。私の指導教官

も大学から多くの支援を受けないまま、オンラインでの授業の準備や実施をしている状況です。特に学生の Welfare (学生福祉) を大変重要視する英国の大学では、先生方は学生のケアを行いながら、オンラインでの授業を準備している状況で、研究とティーチングの両立を図ることがとても大変そうです。

私は好きな英単語が数え切れない程あります、その中でも特に気に入っているものに「serendipity」という単語があります。

(フランス語源で実際に発音した際の音が素敵です。) 日本語では、「思わぬ(素敵な)偶然の出会い」と訳されます。辞書には「素敵な」という部分は含まれていません。ただ「素敵な」偶然の出会いに巡り会えた時に使用する単語だと解釈して私は使用しています。コロナ禍のオンライン上での大学教育ではこの「serendipity」が大いに欠如しているように感じます。講義の直後に教授に質問に行ったり、コースメートと何気無いタイミングで学問を討論したり、校舎の廊下で偶然に知り合った誰かが一生涯の親友になったり、クラブ活動やボランティア活動などの課外活動に従事して先輩後輩関係を学んだり、大学という学びの場に身を置くからこそ、享受できる、ありとあらゆる「serendipity」の可能性が取り去られてしまっています。

2)コロナ後の大学教育のあるべき姿

これまででは、大学教育が提供すべき「学びの場」がコロナの影響を受けて、どのように変化したか議論してきましたが、最後にコロナを経た後の大学教育のあるべき姿について、考えたいと思います。現在実施されている大学教育では学生や教授間での対面で

の交流が大きく欠如しています。ただ、大学教育がオンライン化したことによって、今後の大学教育のあるべき姿も転換点を迎えると考えられます。その一つに包括的教育 (Inclusive learning) が挙げられます。大学教育は「post-18 education」とも呼称されるように、高校を卒業した直後に進学することが一般的な高等教育機関と認識されがちです。ただ、授業や大学全体の活動がオンラインに移行した結果、これまででは大学教育に参画することが物理的にできなかつた場合(フルタイムの仕事がある場合、障碍を持つ場合、介護の必要がある場合)でも大学教育に平等にアクセスできる変革の時代が訪れました。たとえ、従来の「normality」が戻ってきた後も、授業を録音することやオンラインと対面授業を混合形式で実施していくことはコロナの負の遺産として継続していくべきだと思います。

最後に、私の研究に価値を見出し、支援をしてくださっている方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。全ての学術分野において共通しますが、特に社会科学の研究は、データ収集からデータ分析を経て研究結果が査読され、日の目に出るまでは多くの時間を有します。現時点では、駆け出しの研究者として私の研究が社会にもたらす効果はあまり大きくないかもしれません。それでもかかわらず、私の研究に可能性を大いに見出して温かく応援してくださっている方々に心から感謝しております。ご支援いただいている、坂口財団の皆様をはじめ、私の研究活動を支援してくださる方々との素敵な出会いに感謝しつつ、この報告書を締め括りさせて頂きたいと思います。

以上